

最新の科学的予測報道による地球システム倫理」として構想し実践していくとし、「そのことのためには、余生を捧げたい」とま

で語ったのであった。私は、伊東会長がこの挨拶を思いつき、第2回大会に参加したのだ。

昨年4月20日付の本紙第1面で、第1回学術大会のこの時の様子を伝えている吉田収東洋大学教授の一文が、第2回大会で配布された「地球システム・倫理学会報第1号」に、そのまま収録されているが、第2回大会では、本紙

だ、日常生活でこのことへの人々の関心はいまだ他人事のように低く、全地球的規模で迫る目の危機的問題に必ずべき意識が、とても十分に深まっているとはいえず、これは大変に恐ろしいことであると思う。

## 地球システム・倫理学会 第2回大会に参加して

### 日常生活の見直しは全生命への責務

文京大学講師 清水良衛

地球環境の待たなしの悪化を前にして、昨年2月、2日間にわたる麗澤大学を会場に「地球システム・倫理学会」

が、NPOや市民個人の参加もあつて発足、その第2回大会が昨年12月、東洋大学で開かれた。発足時、学会の会長に就任した伊東俊太郎東大名誉教授の、この時の挨拶が忘れられない。即ち、「見通しのつかない不穏な時代」の「危機的状況」にあつて、「地球温暖化をはじめとする環境問題」を「全地球的関連において考察し、そのシステムとしての倫理をあらためて構築」していかねばならない時に来ており、実践問題としてのその必要性を、「地

の客員論説委員でもある科学ジャーナリスト相良邦夫氏の発表もあつた。「地球温暖化が問う地球環境と人類の危機」日本の第一線科学者による最新の研究成果」と題しての発表で、地球環境の現状が、すでに引き返しの効かないほど、深刻なところに近づいていることが具体的に報告され、これは参加者に改めて大きな衝撃を与える内容であつた。

この現実こそ、もっと広く、人々に知らなければならないことであり、消費と生産構造を含ん

だ日常生活の反省と転換が求められるゆえんである。思うに、地球環境の悪化は、産業革命以来の石化燃料消費の蓄積に始まっていることだが、そこでの文明開化と進歩と称する生活が、大自然がもつ自然回復力の限界を十分に超えるまでに拡大して生じた、特にここ30年ほどの経過の中で急激に生じたことであつて、現代を生きる私たちの地球の未来に対する責任は極めて重い、とされなければならぬ。

鎮守の森を大切に「もったいない」の自覚を深めた生活こそ、日本人にとっての第一歩であらう。